



《五節句蒔絵手箱》柴田是真

美をつくし

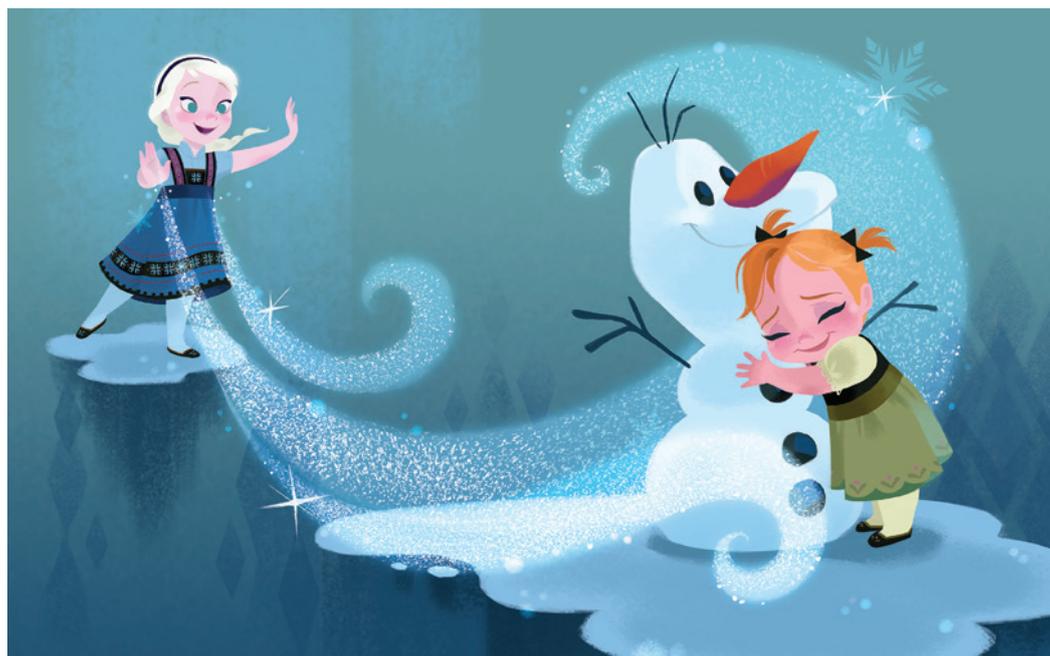
vol. 188

大阪市立美術館だより
平成29年9月1日発行

MI WO TSUKUSHI

ディズニー・アート展 《いのちを吹き込む魔法》

2017年10月14日(土)―2018年1月21日(日)



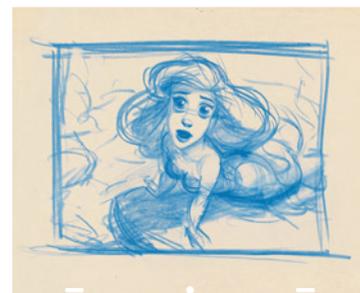
A



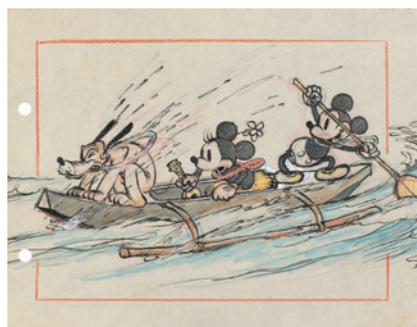
D



E



F



B

ミッキーマウスの誕生作となった『蒸気船ウィリー』から、『白雪姫』『ピノキオ』『美女と野獣』『アナと雪の女王』、そして最新作『モアナと伝説の海』(MovieNEX発売中/デジタル配信中)まで、約90年にわたるウォルト・ディズニー・アニメーション・スタジオの歴史を紐解く、原画やスケッチ、コンセプト・アートなどの作品約500点を展示。現在、好評開催中の東京展の後、ついに大阪へやってきます!! 展覧会のコンセプトは「いのちが吹き込まれた瞬間」。クリエイターたちは想像力を羽ばたかせ、その時代の最新技術を駆使することで、いのちを吹き込む技=魔法を生みだしてきました。キャラクターたちが、まるでいのちを吹き込まれたようにいきいきと動き出す、ディズニー・アニメーションのイメージーションやイノベーションをぜひ体感して下さい。



G



C

A.《アナと雪の女王》より 2013年 B.《ミッキーのハワイ旅行》より 1937年
C.《ふしぎの国のアリス》より 1951年 D.《蒸気船ウィリー》より 1928年
E.《パンピ》より 1942年 F.《リトル・マーメイド》より 1989年
G.《塔の上のラプンツェル》より 2010年 H.《モアナと伝説の海》より 2016年
©Disney Enterprises, Inc.



H

作品紹介 関蓑洲「象図」

画面いっぱいに大きく描かれた1頭の象。2曲1隻の屏風に迫力のある姿で描かれているが、やや窮屈そうであり、その目はどこか寂しげにも見える。絵の周囲には更紗(人物・鳥獣・花などの模様を多色で染めた布でインドやジャワなどから渡来した)が用いられており、異国情趣がよりいっそう強調されている。

この絵を描いたのは、幕末の大坂を中心に活躍した関蓑洲(1802~1875)という絵師である。詳しい伝記はわかっておらず、現存作例もあまり知られていないが、同じ大坂の絵師である鎌田巖松(1798~1859)に絵を学び、山水・人物・花鳥を得意としたと伝えられる。画面右上に、「慶応丙寅春桃花節応需蓑洲真写」と記されていることから、慶応2年(1866)の春、桃花の節句に蓑洲が描いたことがわかる。また、「真写」と続けて記されていることから、象のありのままの姿を描いた作品と考えられる。確かに、画面を注意深く見てみると、頭

部から背中にかけて生えている毛や、生々しい鼻の描写などからは、象を目の当たりにして描いたようなリアルな感覚がうかがえる。

実際、この絵のモデルになったと考えられる象の存在が知られている。その象は、アメリカ船により横浜港にもたらされ、文久3年(1863)に江戸の西両国で見世物になったとされる象である。この象の人気は大変なものだったらしく、江戸では象の姿を描いた浮世絵が数多く刊行された。同年刊行の『舶来絵象紙』という冊子に記された仮名垣魯文の「舶来象略演義」においては、この象について次のように説明されている。

ときに 文久三年三月 上旬より、江都西両国 広小路に於て、諸人の眼目を新にする 大象の雌一匹、元来天竺馬爾加国ヒツプルヘルゲン山のふもと 数千里の大原野に生じて、今年僅に三歳、総身灰色にして、頭の長さ四尺二寸、同巡り一尺五寸、末のかたにては六寸ばかり(後略)

これによれば、文久3年の3月上旬から江戸の西両国の広小路で見世物となった象は、インド生まれのメスで、この年に3歳であったことがわかる。その後、明治7年(1874)まで全国各地を巡回したとされており、大坂では慶応2年の正月から難波新地で見世物になっている。同年春に蓑洲の「象図」が描かれていることから、この象がモデルになったと考えられているわけである。

そのような目で「象図」を詳しく見てみると、比較的ラフな筆致ではあるものの、アジア象(インド象)の特徴がよく捉えられていることに気づく。アフリカ象より小さく四角い耳、短い牙、先端の上部に突起のある鼻、さらには二つの盛り上がりのある頭、前足に5つ後足に4つある蹄、丸いかたちをした背中など、アフリカ象とは異なるアジア象の特徴がしっかりと描かれている。これらの描写は、観察の賜物と言っていだろう。

大坂においては浮世絵

に描かれることはほとんどなかったようだが、蓑洲のほかにも、玉手棠洲(1795~1871)や藪長水(1814~1867)といった大坂の絵師たちがこの象を描いている。それらの中においても、蓑洲が描く象はひときわ大きく迫力があり、アジア象の特徴を的確に捉えている点で特筆すべきものがある。蓑洲により「真写」されたリアルな象の姿は、実際の象を目の当たりにしたのと同じくらいの驚きを当時の鑑賞者に与えたことだろう。

本物の象を目にする機会はほとんどなく、写真なども普及していない時代、一般的な象のイメージといえば、普賢菩薩像や涅槃図、あるいは江口の君図や二十四孝図などに描かれた理想化された白象の姿であった。現代の我々の目からすると当たり前のように感じられる蓑洲の「象図」は、当時の人々にとっては逆に異様なものに見えたかもしれない。

大政奉還を翌年に控えた慶応2年、画家の冷徹な眼差しにより描かれた「象図」は、近代の幕開けを感じさせてくれる点でも興味深い作品なのである。

(秋田達也)



《象図》 関蓑洲 慶応2年(1866) 紙本墨画淡彩 2曲1隻 174cm×139cm 本館蔵(倉田陽三氏寄贈)

土佐光起 生誕400年 近世やまと絵の開花 —和のエレガンス—

2017年9月2日(土)ー10月1日(日)



A



B



C



D



E



F

- A. 土佐光起 《源氏物語繪巻》(部分・「帯木」) 大阪青山歴史文学博物館
 B. 土佐光起 《清宮女御像》(部分) 個人
 C. 土佐光成 《土佐家業代肖像・土佐光起(勇光院殿)像》(部分) 京都国立博物館
 D. 土佐光起 《春秋花鳥図屏風》 公益財団法人額川美術館
 E. 土佐光起 《松に猿図襖》(部分) 悲田院(京都)
 F. 土佐光起 重要文化財《大寺縁起》(下巻・部分) 開口神社(大阪)

「やまと絵」(大和絵)は、四季の自然、そこに生きる人や生き物を優美な線と色彩で描く日本の伝統的な絵画様式です。古代以来のやまと絵の伝統を継承した土佐派は、室町時代には宮廷の絵画制作を主導する絵所預(えどころあずかり)の職を世襲して権威を誇りました。その流れを受け継いで江戸時代前期に活躍したのが土佐光起(1617~91)です。光起は狩野派など漢画系流派の水墨表現や中国絵画の写実表現をとり入れてやまと絵の画題を一気に拡大し、幕末まで続く流派体制の基礎を整備しました。

本展では今年、生誕400年を迎えた光起を中心に、その子・光成らの清新、かつ繊細優美な画風に改めて注目し、雅やかな「和」の情趣にみちた近世やまと絵の魅力をご紹介します。光起の代表作として知られる《春秋花鳥図屏風》(写真D)をはじめ、近年修理が完成した重要文化財《大寺縁起》(写真F)、また寺外では初公開となる《松に猿図襖》(写真E)など総数50点余りが出品されるこの機会をどうぞお見逃しなく!

(知念 理)

助成

公益財団法人
POLA ART FOUNDATION



芸術文化振興基金助成事業

◆講演会

9月16日(土)

「土佐派の流れと光起」

講師 = 河田昌之氏(大阪芸術大学教授・和泉市久保惣記念美術館館長)

◆美術講座

9月17日(日)

「流派体制確立期の土佐派—光起と光成の画業」

講師 = 知念理(大阪市立美術館 主任学芸員)

時間: 各日とも午後2時—午後3時30分

◆見どころレクチャー

9月15日(金)、9月22日(金)、9月29日(金)

時間: 各日とも午前11時から30分程度

※いずれも会場は美術館1階講演会室
定員150名(申込不要、先着順、聴講無料、ただし、当日の本展観覧券が必要)

高僧のおもかげ—仏教美術

2017年10月14日(土)－11月26日(日)

仏教の隆盛は、信仰と真摯に向き合った僧侶の存在に支えられてきました。特に教義の大成者や新たな宗派の祖となった僧侶は、死後も人々から尊ばれ、彼らの肖像は礼拝の対象となりました。今回の展示ではその肖像と信仰に関わる作品を並べ、遠き日に生きた高僧のおもかげに触れてみます。



重要文化財《弘法大師像》 三重・大宝院
鎌倉時代・13-14世紀

書画にあそぶ

2017年10月14日(土)－11月26日(日)

臥して以て之に遊ぶべし—中国・南朝宋の時代、宗炳(375-443)という山水画家のことばです。老齢のため遠出が



《秋声賦意圖》 華岳 清時代・乾隆20年(1755)
本館蔵(阿部コレクション)

できなくなった宗炳は、壁に描いた山水を眺め、まるでその景色に入りこんだかのように心を楽しませたといいます。古人の鑑賞にならない、中国書画の作品世界へ旅してみましよう。

物語×絵画

2017年10月14日(土)－11月26日(日)

古来、日本では多くの「物語」が育まれてきました。その豊かな世界は、画家たちの想像力を刺激し、様々な「絵画」を生み出しました。優れた画家たちによる作品は、物語の魅力を私たちにまざまざと伝えてくれます。所蔵・寄託の作品から、近世・近代の画家たちによる物語をテーマとした絵画をご紹介します。



《蟹子復讐之図》 上田公長 江戸時代・19世紀 本館蔵(小菅長次郎氏寄贈)

カザールコレクションと私たちと未来と

2017年11月28日(火)－2018年1月21日(日)

カザールコレクションの漆工品を4室にわたって展示いたします。印籠・根付・大名婚礼調度などの優品をご鑑賞ください。昭和56年(1981)以降に収蔵した作品は4000点を超え、当館蔵品の中核を形成しています。私たちは、作品の数々を享受するとともに、コレクションを未来へ継承する大切な役割を担っています。



《月に兎・太陽に鳥蒔絵螺鈿印籠》
古満寛哉銘(花押) 江戸・明治時代
本館蔵(カザールコレクション)

桃の節句—ひなまつり

2018年2月24日(土)－3月25日(日)

雛祭りは、「ひひな遊び」(雛遊び)と、季節の変わり目(節句)に人形などを川や海に流してけがれを祓う、「上巳の祓い」とが融合して生まれたものと考えられています。その確立は、江戸時代18世紀中頃と、比較的新しい年中行事と言えます。手間と時間をかけて、精巧につくられた人形、小さな雛道具類に息づく極小美の世界をお楽しみください。

古銅の美—中国と日本の金属工芸

2018年2月24日(土)－3月25日(日)



《青銅 饗餐文罍》 殷(商)時代・紀元前12-11世紀 本館蔵(山口コレクション)

古代中国では技巧を凝らした青銅器が盛んにつくられ、祭祀に用いられました。後世、青銅器は本来の役割を離れ、その錆でさえも鑑賞と愛玩の対象となります。ここでは、そうした中国の青銅器とともに日本の銅鏡や仏具など古銅の美の世界をご紹介します。

目で味わう—詩歌、奏楽の調べ

2018年2月24日(土)－3月25日(日)

歌仙絵、名所絵、肖像画などの画面には様々な形式の詩歌が加えられ、仏画、物語絵、風俗画などにはしばしば楽器の演奏がみられます。また楽器そのものをかたどった各種の工芸作品もあります。それぞれの作品からあふれ出る詩情、調べの心地よさを「眼」でゆったりと聴きながらご鑑賞ください。



《三十六歌仙図屏風》(部分) 伝狩野山楽
江戸時代・17世紀 個人蔵

2016年度の作品収集

昨年度は106件の寄贈（内訳は右の表の通り）を受けました。今後の展示、調査研究などに活用をはかっていきます。引き続き皆様からのご理解とご協力をお願い申し上げます。

寄贈作品	件数
伊勢崎淳《備前 茶盃》他	28
《祀三公山碑拓本》(写真①(部分))	1
山岡鉄舟 扁額《寿百康》	1
赤松麟作《自画像》他	68
《洛中洛外図屏風》他	2
《花唐草刻文石棺》	1
《銅造玄天上帝像》	1
《天龍山 文殊菩薩頭部》	1
今尾景年《宇治製茶図》他	2
生田花朝《春の絵馬堂》(写真②)	1
計106件	



①「多彩なる隷書—漢の石刻」
9/2～10/11において公開予定。



②

所蔵作品の貸出

他館への貸出を予定している当館所蔵作品です。展示期間など詳細は各施設にお問い合わせください。

《豊臣秀吉像》 栃木県立博物館(宇都宮市) 2017年9月16日(土)～10月29日(日) 「中世宇都宮氏—頼朝・尊氏・秀吉を支えた名族—」	
《名賢宝絵冊》のうち3葉 サントリー美術館(東京都) 2017年9月16日(土)～11月5日(日) 「天下を治めた絵師 狩野元信」	
狩野派《四季花鳥図屏風》ほか 計4件 ウフィッツ美術館(イタリヤ) 2017年10月3日(火)～2018年1月7日(日) 「花鳥風月—屏風・襖にみる日本の自然—」	
重要文化財 葛飾北斎《潮干狩図》 あべのハルカス美術館(大阪市) 2017年10月6日(金)～11月19日(日) 「北斎—富士を超えて—」	
《七宝十字架》 五島美術館(東京都) 2017年10月21日(土)～12月3日(日) 「光彩の巧み—瑠璃・玻璃・七宝—」	
伝 仇英《九成宮図巻》ほか 計2件 静岡県立美術館(静岡市) 2017年10月21日(土)～12月10日(日) 「美しき庭園画の世界—江戸絵画にみる現実の理想郷—」	
狩野派《龍虎図屏風》 茨城県近代美術館天心記念五浦分館(北茨城市) 2017年10月25日(水)～11月26日(日) 「龍を描く—天地の気」	
趙左《竹院逢僧図》ほか 計6件 泉屋博古館 分館(東京都) 2017年11月3日(金・祝)～12月10日(日) 「典雅と奇想—明末清初の中国名画展」	

特別展

江戸の戯画—鳥羽絵から北斎・国芳・暁斎まで—(仮称) 2018年4月17日(火)～6月10日(日)

太平の世が長く続いた江戸時代には、多くの戯画が描かれました。一口に戯画といっても多種多様なものがありますが、本展では「鳥羽絵」をキーワードとして江戸時代の戯画についてご紹介します。

鳥羽絵は、広く戯画や漫画を指す言葉として使われることもあります。より限られた意味では、江戸時代に流行した軽妙な筆致の戯画を指します。18世紀の大坂では鳥羽絵だけを掲載した鳥羽絵本が出版され、明治に至るまで刊行され続けました。その人気は上方に留まらず、江戸の浮世絵にも影響を見出すことができます。特に北斎が描いた戯画には、鳥羽絵本からの明らかな影響を指摘することが可能です。また広く捉えれば、国芳の戯画もこのような流れに位置づけることができるでしょう。

本展では、18世紀に刊行された鳥羽絵本をはじめ、それを洗練させたと言われる大坂の耳鳥斎、鳥羽絵の影響を受けた江戸の北斎や国芳、そしてその流れをくむ暁斎など、時代や地域により変化しながらも、脈々と流れ続ける笑いかたちをご覧ください。この機会に江戸時代の戯画の世界をぜひお楽しみください。

◆表紙作品紹介

《五節句蒔絵手箱》柴田是真 明治時代19世紀 本館蔵(カジュアルコレクション)

しょうぶたち かみかぶと
菖蒲太刀に紙兜と葵で端午の節句(五月五日)をあらわすなど、五節句にちなむ景物を描いた手箱。金銀蒔絵や螺鈿、切金などの技法が映える瀟洒な趣の作品である。

大阪市立美術館 天王寺公園内

Osaka City Museum of Fine Arts

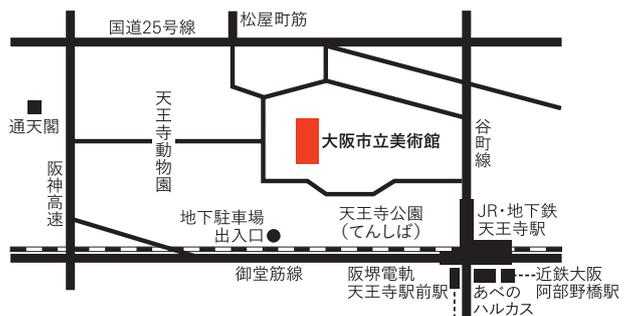
〒543-0063 大阪市天王寺区茶臼山町1-82

tel. 06-6771-4874 fax. 06-6771-4856

<http://www.osaka-art-museum.jp>

開館時間＝9:30～17:00(入館は16:30まで)

休館日＝月曜日(ただし月曜日が祝日の場合は翌平日)



交通案内：地下鉄御堂筋線・谷町線、JR「天王寺」、近鉄南大阪線「大阪阿部野橋」、阪堺電軌上町線「天王寺駅前」下車、または市バス「あべの橋」下車、北西へ約400m